

立命館守山中・高の10年間の平和教育の到達点と今後の課題

角原 真

(立命館守山中学校・高等学校教諭)

1. 本校の沿革と平和学習

市立女子高校から法人への設置者移管という日本で初の経過を辿り開校した立命館守山高校は、2007年に中学校を併設し、現校地への移転を果たしてから立命館守山中学校・高等学校として10年が経過した。本校は開校当初から文部科学省によるスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定と立命館大学びわこ・くさつキャンパス（BKC）理系学部との強固な連携を特色にして「地域に学び、世界に発信する」をモットーに教育活動を行っている。

今年度は、iPadを基盤にしたICT機器活用教育改革の実施が全学年に及ぶこと、中学フロンティアサイエンスコースが完成年度を迎えること、また守山中学校からの中高大一貫生徒がいよいよ大学を卒業することなど、様々な点で大きな節目となり、2016年9月滋賀県立芸術劇場びわ湖ホールで行われた10周年記念式典も大成功に終わった。

また、立命館大学の附属校として、本校では教学理念である「平和と民主主義」に基づき、中学校・高校の発達段階に応じた平和学習を系統的に実施している。その一つに、毎年本学創立記念日（5月19日）前後に、「立命科」という本校独自の授業を行っており、立命館憲章に則った生徒の教育に努めている。

グローバル化や情報が進展し、平和教育という言葉自体の概念や理解が多様化する中、本校では消極的平和の立場からの狭義の平和教育ではなく、一貫して積極的平和の立場からとらえた広義の平和教育の立場に立っている。具体的には、特定の教科・科目にとらわれることなく、構造的暴力、異文化理解、人権問題、環境問題と際限なく平和教育の題材があることを理解させ、それぞれの授業において、構造的暴力をなくすために自分たちが考えなくてはいけないことは何か、自分たちができることは何か、という点を問いただし、そこから「平和とは何か」ということを思索させることに力点をおいている。

本稿では、この立命館守山中学校・高等学校の10年

間の歩みの中での平和学習の到達点と今後の課題についてまとめていきたい。まずは本校の様々な授業実践について、以下に紹介する。

2. 中学校での授業実践報告

報告1 中1美術 「平和ポスター」作成について
担当者：美術科 菊池恵

内容：

中学校一年生では「つ・た・え・る」というテーマで、一年間を通じ様々な表現媒体で課題に取り組んでいる。その中で「芸術からの平和希求」として、様々な芸術家の平和活動や平和をテーマにした作品を鑑賞するとともに、自分たちにとって身近な表現として平和ポスター制作を課題とし、自分自身の「生」「平和」「社会」について考えるきっかけとしている。

生徒たちは、表現したかった内容を授業内でプレゼンテーションし、その後相互鑑賞・相互評価をした。また、作品は校内展示をしている

鑑賞作品（例）

戦時下の日本で描かれた「戦争画」

香月康男

モザンビークにおける「銃を鋏へ」+「エコ&ピース」プロジェクト

やのべけんじ ピカソ「ゲルニカ」

丸木位里 平山郁夫 等

まとめ：

芸術文化を通じて平和のメッセージを伝えようとする活動は世界中で行われ、多様な表現で作品発表されている。言語の壁を越えた芸術を通じてのメッセージは、多くの人類に「平和」の大切さと感動をもたらし、次世代へ「平和」に対する意識を伝える。芸術が問う「戦争と平和」をうったえた作品の鑑賞と「平和ポスター」制作をきっかけとし、世界の平和や自分自身のあり方を見つめなおし、「今自分が出来る事」や「これから何をすべきか」の意識を芽生えさせることができた。



「そう！ HAPPY」
阿部 瑞希

「平和が世界中の人の当たり前になりますように」という願いを込めて描きました。いつもの生活の中で感じる「ちょっとした幸せ」も世界の平和に繋がっていくと思います。点描で虹を描くことで色々な人々の個性を表現しました。平和が世界中の人の当たり前になるために「ちょっとした幸せ」が集まって、世界を平和に変えることができるように私も行動していきたいと思えます。平和な世界をつくるには、まずは一番小さな所からの幸せが大切です。

報告2 中3理科 「科学技術と人間」の授業の取り組み

担当者：理科 藤田翔平

ねらい：

過去の偉人たちの苦難から教訓を得るとともに、現状の問題を認識し、世界平和の実現を科学的なアプローチで考える。

内容：

- ①世の中に対して大きく貢献した科学者を生徒が挙げる。
- ②その科学者について以下の点について調査し、まとめる。
 - ・その科学者の研究成果は何か。
 - ・その科学者の成果はどのような場面で役立てられているか。
 - ・研究過程を調べ、科学者が直面した問題を調べる。
- ③②で調べた科学者が直面した問題の改善する方法を考える。
- ④世界中の人々がこれから平和かつ幸せに暮らすために科学技術が発展していく必要がある。どのようなことを意識して研究していく必要があるかを考える。

成果と課題：

科学の発展が人間の暮らしを豊かにしていることはこれまでの学習でも理解している。それは多くの科学者の苦悩の末、得られた結果だということを認識することができた。技術を戦争に流用されたものや、宗教的な理由で曲解されたもの、価値が無いと理解されなかったものなど、科学者が誰しも順風満帆ではなかったことを生徒自ら調べて考えることができた。また、過去の事例を教訓に平和な世界を築くために、科学的な視点からのアプローチを考えることができた。

今回の目標は過去から学ぶことを重点に置いていたが、今回は、現在大きく問題視されているエネルギー問題の平和的解決を科学的視点からアプローチしたい。

報告3 中2国語 山川方夫 作「夏の葬列」の授業の取り組み

担当者：国語科 南英美

内容：

この教材は、太平洋戦争時、小学校3年生であった主人公が疎開先で銃撃のもとに友人を突き飛ばしてしまったが、その友人がどうなったのかわからないまま東京に戻り、その出来事を大人になってからも忘れられずに過ごしているという話である。物語は大人になった主人公が当時の疎開先を訪れる場面から始まり、友人を突き飛ばしてしまった事件の回想、そして現代に戻り友人に似た写真の葬式を見かけ、自分は殺人を犯していないのではないかと喜ぶものの、その写真が友人の母のもので、友人は銃撃のもとに突き飛ばされたときに亡くなっていたことが明らかになり、友人とその母の死から自分は逃れられないと覚悟を決めて話は終わる。

まとめ：

本校では、中学校2年生の6月に行うAPU（立命館アジア太平洋大学）長崎平和研修の中で平和学習に取り組んでいる。そのため、戦争の中で起こる悲劇はさまざまな形があるということを理解するために、研修前にこの作品を読むことにしている。例年、作品を通読したうえで研修に行き、研修を終えてから作品の主題を読み取るという形式をとることで、戦争の悲惨さというテーマの一つを実感しながら読み解くことができている。

ただし、2016年度においては、熊本地震の影響でAPU長崎平和研修の実施時期が11月になり、研修を終えてからの主題理解とはならなかった。しかし、研

修前に戦争に関わる作品に触れておくことで、平和学習への意識づけの効果はあったと考えられる。

＜生徒の読み取った作品の主題＞

- ・この作品の主題の一つ目は、戦時中という状況では人間は人のことが考えられなくなる。自分のことしか考えられなくなるということです。もし、私たちが戦時中に生きていたら彼のように自分のことしか考えられなくなるでしょう。
- ・ヒロ子さんと母親の死をもたらしたのは戦争である。
- ・この作品が伝えたかったことは戦争の悲惨さと事実に向き合わなければいけないということだと思う。

報告4 中学校2年生の平和学習の取り組み

対象：中学2年生全員（道徳・総合学習）

目標：

1) 知識

- ①日本の戦争体験を加害・被害両面から理解する。
被爆（DVD2本）
- ②地域における戦争の歴史を理解する。
滋賀県平和祈念館連携（東近江市）
- ③差別や貧困・格差のない「積極的平和」「構造的暴力」の視点から平和問題を理解する。平和学講座の実施。
- ④地球的な平和諸問題を理解し、それらの関連性を総合的に考察する。
- ⑤平和問題を克服するための世界的な努力と試み、日本の役割を理解する。

2) 技能

- ①主体的に資料を収集し、調査できる。調べ学習の実施。
- ②平和の問題を批判的に分析できる。
- ③調べたことを整理表現し、広く発信することができる。発表（事前・文化祭・ニュージーランド研修・新聞投稿）
- ④周囲と共感的・平和的に接することができる。

3) 態度

- ①自分を見つめ、他者を尊重し、世界の多元性を受容する。
（APU長崎平和研修・ニュージーランド研修との連携）
- ②暴力の被害者に共感し平和の問題を自分に引き寄せる。（いじめ・暴言への対応）
- ③歴史的・国際的視野で平和問題への興味関心を

持つ。

- ④異なる文化をもつ人々と友好的に生きようとする。

（APU長崎平和研修・ニュージーランド研修との連携）

- ⑤勇気と希望をもって平和な社会形成のために協力しようとする。

内容：

「総合」土曜授業活用の1つとして「平和と民主主義」という本学の教学理念に基づき「平和学習」を実施する。

- 1) 創立記念LHR「立命科」での「平和と民主主義」講座
- 2) 長崎原爆写真展（長崎原爆資料館より借用した写真パネル）
- 3) APU長崎平和研修（2泊3日）
- 4) 講演会：被爆講話 広島被団協 坪井直氏 / 長崎 下平作江氏
- 5) 世界平和祈念ポスター・標語展（長崎原爆資料館開催）に夏休み課題として参加
- 6) 文化祭展示 平和のメッセージを伝える（2014年度・2015年度）
- 7) 立命館大学国際平和ミュージアム立命館附属校平和教育実践展示への出展
- 8) ニュージーランド研修での現地プレゼンテーション。平和をテーマとしたセッション（中3）
- 9) 平和学講座 APU淵ノ上英樹教授 出前講義

3. 高等学校での授業実践報告

報告1 高3 学校設定科目 国際協力の取り組み

担当者：社会科 八反和之 秋武祥仁 田辺記子

対象：高校3年生 AMCコース全クラス

内容：

この科目は、高校3年生アカデミアコース（AMC）の全生徒を対象とした学校設定科目である。実施期間は10年に及ぶ。この科目の目的は、「高校生ができる国際協力」を提案することにある。そのために、授業構成を次の6点の通りとしている。

- 1) NPO／NGO団体など実際に国際協力に取り組んでいる団体・企業から講師を派遣していただき、国際協力の現場の様子を伝えてもらう。
- 2) ワークショップなどを通して貧困・教育・地域紛争などの問題に対する理解を深める。
- 3) 6～7名単位のグループに分かれ、グループごとに課題設定をし、その解決に向けた方法などを検討議論し、プレゼンテーションできるように

にまとめていく。

- 4) 「高校生ができる国際協力」として、各グループがプレゼンテーションを行う。
- 5) 評価の高かったグループは学年代表として全校生徒の前でプレゼンテーションを行う。
- 6) 自分たちの提案をもとに、実際に企業と提携し商品開発などに取り組む。

成果と課題：

この科目では、英語や数学、理科などといったこれまで系統立てて学んできた知識を「国際協力」という観点からとらえ直し、課題解決に向けた手法を考案することで、本学の教学理念である「平和と民主主義」についてより深く理解できたと考えている。生徒たちが選ぶ課題は貧困、食糧問題、教育問題、水問題や環境問題、難民問題、貿易問題など多岐にわたるが、

「世界を変える」ことは不可能ではなく、大切なのはそれがたとえ小さな一歩であっても踏み出すことである。その積み重ねが世界を動かし、変えていく力になるという事を理解し行動できる人へと成長させる。その例として、2015年度の取り組みである「COCOLLABO “R” IP」を紹介する。これは、フェアトレードについて学んだグループが企業と協力して「リップクリーム」を商品開発し販売した取り組みである。



校内プレゼンテーション



協力企業の社長との打ち合わせ

成果として次の3点を挙げるができる。

- 1) 自分たちが行動をしていないだけであって、どんなに小さなことでも、とにかく行動してみることが大切であるということ学んだ。
- 2) 「世界の現状を変えていくには、どうすればいいか」を考え抜くことで、それが、他者理解や異文化理解につながっていくことを学んだ。
- 3) 自ずと自分自身がおかれている立場を見つめ直す契機となり、「平和」や「民主主義」は世界的規模で重要であることを学んだことで、進路選択にあたって、自己認識をさらに深める姿勢がみられた。

今後の課題としては、これらの成果をさらに継続深化させる取り組みにしていけるよう授業のあり方などを考案することである。

また、この講座をとおして、2011年の東日本大震災のボランティア活動も5年間継続して行っていることも成果の1つとして挙げられるが、詳細はこれにとどめておく。

報告2 高2 海外研修国際ボランティアコース (バンコクコース)

担当者：社会科 田辺記子

対象：高校2年生 AMCコース 海外研修バンコクコース 参加生徒

ねらい：

高校2年生の3月に実施されるAMC全員参加の海外研修(2013年度までは高3の夏休みに実施)7コースのうち1コースに「国際ボランティアコース」がある。このコースは、アメリカのジョージア州に本部を置く国際NGO「Habitat for Humanity International(以下ハビタット)」の全面協力を得て行われている。生徒たちはハビタットの掲げる、「A world where everyone has a decent place to live(誰もがきちんとした場所で暮らせる世界)」という理念のもと、貧困層自立支援のための海外建築ボランティアを实践する。「建築」とは言うもののこの活動で最も大切なことは、「家を建てること」そのものではなく「高校生にできる国際協力を实践する」というところにある。この研修では海外の人たちの暮らしを肌で感じ、そこに住む人々が本当に必要としていることは何なのか、そのために自分たちができることは何かを考え、実践することを目的とする。また、帰国後はそこで得た体験を自分たちの実生活と関連付け、今後どう生かしていくのかを考える。

内容：

研修地はタイのバンコク、期間は12日間で滞在中はすべてホテルステイとなった。参加生徒は20～25名。前年11月から2月までの期間に、土曜講座として7回の事前学習を設けた。現地が必要となる情報や前もって考えておきたいことなど（例：「ボランティアをする」とはどういうことか、スラム街はどのようにしてできたのか、など）を学習した。家の建築は柱と屋根しかない状態から始め、現地ハビタットスタッフやスキルドワーカーの協力を得ながら、6日間で土台基礎・床・壁において素人でできるところまで建築を進めた。毎夕食後にミーティングも行い、情報共有とともに「本当に必要な支援とは何か」、「自分たちが今築いているものは何なのか」、「言葉の壁をどう乗り越えるか」などを話し合いながら日々の作業に取り組んだ。

成果と課題：

生徒は国際協力をすることに身構えなくなったと同時に、その難しさを実感できるようになったと感じる。国際協力は初めから大きなことを成し遂げようとするのではなく、目の前の困っている人を助けようとするところから始まる。さらに言えば、「助けたい」「何かの役に立ちたい」と思うその気持ちを持った瞬間から始まっている。しかし一方で、言葉の壁や文化の違い、国を取り巻く環境の違いから、その思いを成し遂げることは容易ではない。生徒は己の「可能性」と「無力さ」を知ったという点において、大きく変化したと考える。

なお、この活動については、JICAグローバル教育コンクール2012レポート部門で入選、第4回ESD大賞(2013年度)では高等学校賞を受賞した。今後は生徒が社会に出てからこの経験をどのように生かしていく



のか、またどういった機会にこの成果を広く発信していくことができるのかということが課題となっている。

報告3 10周年記念特別企画 ポーランド・ドイツ

ピース・スタディツアー

担当者：社会科 田辺記子

対象：高校1年生～3年生有志（10名）

ねらい：

創立10周年にあたる今年、本校は「平和と民主主義」を教学理念とする立命館学園の一員であることを再確認し、その社会的な責務を果たす必要があると考えた。21世紀の世界は実に混沌としており、社会のあらゆる情勢において先が見えにくい。だからそこ、真に平和を希求し、その努力を惜しまない人物が求められる。戦後70年がたち、あれから何が変わり、そして何が変わっていないのか。この研修は実際に現地へ赴き、世界が経験した悲劇を目のあたりにすることで、「希望」や「恐怖」を時代・人種・国境を越えて共感するとともに、問題の本質をとらえ、今一度「平和と民主主義」について考えることを目的とする。

内容：

研修は夏休みを利用して、5泊8日でポーランド(ワルシャワ、クラクフ)とドイツ(ベルリン)をまわった。事前学習は、4月～7月の間に定期的に課題を出し、各自で取り組むとともに、出発前には合宿を行い、歴史的背景や前もって考えておきたいことなどを学習した。現地では、第二次世界大戦勃発の地ワルシャワ、ホロコーストの地アウシュヴィッツ強制収容所、大戦終結の会談が行われたポツダム、そしてその後の冷戦時代を象徴するベルリンを訪問し、単に戦争の悲惨さだけではなく、人間の本质について理解するよう努めた。また、ポーランドやドイツの学生と交流し、相互に異文化理解を図りながら、21世紀におけるグローバル社会のあり方を考える内容となった。また、事後学習では外部講師を招いて「プレゼンテーションの手法」を学び、現地で感じ考えたことを、どう他者に伝えていくかということを学習した。

成果と課題：

この研修では、「ホロコーストは、戦争の悲惨さだけでなく、人種問題や難民問題など、現代につながる諸問題を提起している」ということを学んだ。ユダヤ人への差別は、戦時においては「虐殺」という形で現れ「残虐行為」とみなされた。しかし、平時においても難民問題に無関心であったり、ヘイトスピーチをすることが平然とまかり通る世の中であるとすれば、それもまた同じように「残虐行為」なのだということに私たちは気づかなくてはならない。人間の本质は、そ

う簡単には変わらない。だからこそ、アウシュヴィッツは戦争が終わった場所であると同時に、私たちが「多文化共生」ということを真に考えなければならない、始まりの場所であること思い起こされた。

研修後は、10周年記念式典での報告会のほか、高3の「世界遺産」授業内での発表、「ワンワールドフェスティバルfor Youth（詳細は次節で紹介）」での活動報告など、生徒が自ら積極的に発表の場を見つけて、広く平和について発信している。今後はこの研修の成果に鑑み、継続した取り組みとしていけるよう検討したい。



報告4 ユネスコ委員会のとりくみ

担当者：社会科 田辺記子

対象：高校 生徒有志組織

ねらい：

本校は2012年度より、ユネスコスクールに認定されている。滋賀県の高等学校では唯一の加盟校であり、全生徒参加の海外研修旅行や3年生授業の「国際協力」、サイテック部の大川プロジェクト（環境問題）などの活動が評価されている。ユネスコスクールに認定されたのち、授業や学校行事・クラブ活動といった枠にとらわれずに、ユネスコの理念に沿った活動を幅広く展開したいとの思いから、生徒有志組織として「ユネスコ委員会」が発足した。

内容：

ユネスコ委員会に所属している生徒は、全員クラブ活動に所属しているため、校内で定期的な活動を行うことが難しい。そこで、週末や長期休暇を利用して、外部諸団体との交流会やセミナー等に参加し、世界が抱える諸問題に対する自分たちの理解を深め、新たな解決策を考えていくことが主な活動となっている。そうした中で、生徒たちが最も力を入れて取り組んでいるのが「ワン・ワールド・フェスティバル for Youth 高校生のための国際交流・国際協力EXPO」の企画・

運営である。このイベントは、世界的な視野を持ち、社会の課題解決に向けて行動を起こす次世代の育成、高校生同士の活動のネットワーク形成、若い世代と大学やNGO・国際機関とのつながりを目的としており、高校生で構成された実行委員会と高校・大学教員・NGO職員で構成された運営委員会によって、プログラムの企画・立案とイベントの運営を担っているのが特徴である。ユネスコ委員会の生徒はその立ち上げ期から参加しており、昨年度は元少年兵の方にビデオレターで出演をいただいていたトークセッションを、そして今年度は実行委員としてフェアトレードと難民問題を扱った2つのワークショップを企画・運営した。

また学校全体としては、海外研修後の外貨コインを利用して「ユニセフ外貨募金」を行っており、毎年多くの寄付金を集めている。

成果と課題：

この委員会での活動を通じて、生徒は単に世界の諸問題を理解するだけでなく、そこから自分たちにできることを具体化し、実現するための方法や課題を見つけていくことができるようになった。それが「ワン・ワールド・フェスティバルYouth」での企画につながっている。時間や場所は限られているが、こうした活動内容について様々な機会を利用し、学校内外へ広く発信していきたい。

また、ユネスコスクールはESD（持続可能な開発のための教育）の推進拠点校として位置づけられているが、学校の組織としてはまだまだ機能していない。教員が個別に取り組んでいるプログラムが、ユネスコスクールという概念のもとに1つのカリキュラムを形成できるようにしていく必要があると考える。

4. まとめ ～到達点と課題～

以上まとめると本校の平和学習の成果・到達点として、以下の3点が挙げられる。

- ・生徒の発達段階に応じた、多種多様な教科・科目での平和学習の実践。
- ・21世紀型スキルの学びを意識した、創造力とイノベーション・批判的思考力・問題解決能力・意思決定能力を育成する「包括的平和教育」という広い視点での学習の実践。
- ・主権者として平和な社会の形成や建設に貢献できる人物の育成を目指す教育。

このような成果がある一方、課題としては以下の2

点が挙げられる。

一つ目は、学年・教科のそれぞれの枠を統括して指導・監督を行う部署が無いことである。つまり、学年をタテ、教科をヨコの軸とするならば、それらの軸を系統的に統括する分掌等あれば、より効果的に平和学習が進められるのではないかと、という点である。皮肉にもこれらは本稿の編集作業中に特に感じた点であり、今後本校の平和教育推進委員としての個人的な課題としても強く感じる点でもある。歴史が浅いことを言い訳にしてきたわけではないが、次の10年に向けての本校の大きな課題の一つとして挙げられる。

二つ目は、これらの授業実践を外部へもっと発信を強めるべきである、という点も挙げられる。現在、毎年秋に立命館大学国際平和ミュージアムにおいて、立命館附属校平和教育実践展示で実践報告を行っているが、より多くの発表の機会を増やすことで、外部からの客観的指標にもとづいた分析・評価を得ることができ、今後の教育活動の発展に寄与できるのではないかと考える。

グローバル化の逆行ともいえる、昨今の世界の保護主義的政策にもとづいたナショナリズム化の動き（英国のEU離脱や米国の新大統領の就任など）から、改めて「平和とは何か」が問われる時代になったと言える。また、わが国でも大学入試制度改革や中学校での道徳の教科化など教育界も大きな変革の時期を迎えている。今後の本校の平和学習を進めていく上で、この10年間の平和学習の実践を土台とし、より信念を持ってこれらの諸課題に向きあっていきたい。